

## 平成30年度入学式式辞

新入生の皆さん、ご参列のご家族の皆さま、本日は、ご入学、誠におめでとうございます。

今年度は、新たにスポーツマネジメント学部第1期生264名を含む、5学部9学科1,824名の新入生をここに迎えることができ、大変嬉しく思います。日本体育大学の教職員を代表して、心より歓迎いたします。

本学は、その母胎を明治24(1891)年に設立された「体育会」とし、このとき、創設者である日高藤吉郎が掲げた、「體育富強之基」(「体育は、富国強兵の基本である」)を建学の精神としています。

昭和24(1949)年に、日本体育大学体育学部が設置されると、国際平和の実現に寄与する国づくりを念頭に、その精神は、「体育は肉体を、より強靱に、豊かにする基礎である」と解されるようになりました。

そして今日では、本学がこれまで、一貫して、体育・身体活動・スポーツを通じて、全ての人々の願いである心身の健康を育んできたことや、世界レベルの優秀な競技者や指導者の育成を追求し続けてきたことなどに鑑み、この建学の精神を、「真に豊かで持続可能な社会の実現には、心身ともに健康で、体育スポーツの普及・発展を積極的に推進する人材の育成が不可欠である」、と解釈するに至っています。

とりわけ、昭和39(1964)年の東京オリンピックは、本学がトップアスリートの養成に大きく力を注ぐ契機となり、以来、日本のスポーツ界の国際競技力向上に大きく貢献しています。

このことは、世界に誇るべき実績として、日体大を燦然と照らし続けています。そして、さまざまなスポーツのトップアスリートや世界レベルの指導者が、学生、教職員として数多く在籍し、他の大学の追随を許しません。

しかし、ここに集う者すべてがそうではありません。「コーチやトレーナーとして、トップアスリートとともに闘いたい」「スポーツ・健康の専門分野を究め、スポーツ科学・健康科学の最先端に触れたい」「年齢、性別、障がいの有無を問わず、スポーツのバリアフリーを実現したい」「大きなスポーツイベントを企画してみたい」「スポーツを通じて、国際交流・地域交流の架け橋になりたい」「子どもたちに体育・身体活動・スポーツの楽しさを伝えたい」「多くのひとを怪我や病気から救いたい」など、それぞれの理想の姿を目指して、多くの学生たちがキャンパスを交叉しています。

わたしたちは、こうした想いをしっかりと受けとめ、それに応えられるよう、入学試験では、その強みや個性を様々な尺度を用いて評価し、多様な人材を求めています。例えば、競技実績に秀で、入学後もその活躍が期待される人、意欲や情熱があり、将来の職業に対する明確なビジョンを持った人、高い学力を有し、知的好奇心に溢れた人、など、いずれもそれぞれの関門を突破し、わたしたちが自信を持って迎え入れた皆さんで

す。

ところでいま、どんな想いを胸に、この入学式を迎えていますか。それぞれの誓いや目標はどのように立てられ、それを実行するための計画は、どう描かれているでしょうか。

自らの「夢」や「希望」、「志」を改めてここで、確認してみてください。

言うまでもなく、「夢」を持つことは、人生を豊かにしてくれます。「希望」の無い人生は闇のように感じてしまいます。どんなにつらい環境にあっても、それを乗り越えようと努力を続けていくことで人生は拓かれ、その先になりたい自身の姿や状況がより一層、鮮明にみえてくるのです。

「夢」や「希望」は、今後変わってもいっこうに構いません。日々、成長を重ねているからであり、新たな気づきがあるからこそ、変化していくのです。当初の思いよりも、もっとワクワクしそうな、さらに自分が輝けそうだと確信できる、そんな「夢」や「希望」に新たに巡り会うことができたなら、その変化は大いに受け容れるべきです。なによりも、そのときの自分に素直であることが大切だからです。大きく視野をひろげ、「夢」や「希望」を描いてみてください。

そして、その「夢」や「希望」には、さらに「志」を加えましょう。「なりたい自分」になるという個人の想いを超えて、多くの人びとの願いを叶えようとする気概、「志」を備えていることが望まされます。もしかすると、その「志」は、「夢」や「希望」に向かって、厳しい未来への挑戦、行動になるかもしれません。自分だけのためではなく、世のため、人のため、世界のために、そしてその「志」が大きければ、さらに時代を超えて、引き継がれていくこともあるかもしれません。

これから4年間、必ずしも、思い描いた通りの学生生活が送れるとは限りません。悔しいことや恥ずかしい思い、様々な経験も重ねていくことになるでしょう。学業や対人関係、就職活動の不安、競技成績の不振など、それなりに辛い、苦しい状況に幾度となく置かれたとき、傍らに「志」をしっかり携えておけば、そこから逃げ出さず、真正面からその壁に対峙し、それを乗り越え、「夢」や「希望」に大きく近づいていけるはずです。

どうか、「なりたい自分」になるために、これから、具体的な努力を積み重ねていってください。

わたしは、1980年、モスクワオリンピックの体操競技日本代表に選ばれながら、この大会に参加することができませんでした。その前年、1979年に開催国であるソビエト連邦、現在のロシアがアフガニスタンに軍事侵攻したことにより、日本がこのモスクワ大会へのボイコットを決定したからです。

また、現役時代、選手生命を絶たれるほどの大きな怪我を2度、経験しました。左脚腓骨の骨折と右脚アキレス腱の断裂です。オリンピックを目指しているなかで、ボイコットと2回にわたる怪我は、いずれも眼前に大きく立ちはだかる強固な壁となりました。

いかにしてこれを乗り越えていくのか、その当時は本当に、このまま暗闇のトンネルから、ずっと抜け出せないのではないか、そんな不安に駆られながら、焦る毎日、苦しい時間を過ごしていました。そんなとき、わたしを支えてくれたのが、自らの「志」であり、また、体操競技の仲間や恩師でした。

「なんのために体操競技を続けているのか」、自らに問い質したとき、「オリンピックの舞台上で美しい体操を披露し、多くの人びとの心を動かしたい」、と心に決めた中学生の頃の自分を思い出しました。

また、厳しい状況に陥ったとき、ふと、まわりを見渡せば、すぐ傍にはいつも同級生、先輩、先生方がいてくれました。

皆さん、日体大の4年間で、真の友と言える仲間を見つけてください。「人生はお互いに思い思われ、なつかしく、ありがたく感じあえるところに本当の幸福がある」、と言います。きっと、生涯にわたる、かけがえのない存在として、ときにそれぞれの人生の道標となってくれるはずです。

いまでは、あの辛く、長い逆境の時に、あきらめない自分、「志」を見失わなかった自分、そしてわたしの可能性を信じてくれた仲間、恩師がいたからこそ、再び1984年のロサンゼルスオリンピック代表に選ばれ、その表彰台で、君が代を聴くことができたのだと、確信しています。

大学入学もそして卒業も、皆さんにとって、ゴールではありません。いずれも、「夢」や「希望」に向かう、ひとつの通過点です。

今日この日を迎え、心地よい満足感と充実感を得ていることだと思いますが、同時に緊張感をもって、改めて自身の将来を見据えてください。そして、本学での日々が、皆さんの未来を切り拓く大切な一步一步であることを強く意識してください。

4年後ここで、卒業を迎えたとき、「日体大にきて良かった」、そう皆さんに思ってもらうことはもとより、ご家族の皆さまにも同じように実感してもらえることを願うばかりです。

わたしの「夢」「希望」をしっかり、その手で掴み取るためにも、高い「志」をもって、何ごとにも果敢にチャレンジしてくれることを強く望みます。

ひとりひとりの「自己実現」に向け、我々教職員は一丸となって、そのための環境を整えていくことをお約束します。

これからの皆さんの頑張りや検討を期待し式辞といたします。本日は、本当におめでとうございませぬ。

平成30年4月3日

日本体育大学

学長 具志堅 幸司